

# 続・『武士道は即ち実業道なり』～渋沢武士道への結論

2026.1.10  
(得丸)

(12月6日研究会) 栄一は偉大なるコピーライターなり

「論語と算盤」 「士魂商才」 「武士道とは実業道」など、数々の“名コピー”を創り出した渋沢栄一にはコピーライターとしての資質があったに違いない。

多くの人々が支持する日本古来のスピリチュアルな考え方である武士道や大和魂を梃子にして、栄一が考える「実業道」の理想を教宣・浸透させたかったのではないだろうか。

『論語と算盤』第8章「実業と士業」より

いまや武士道はいい換えて、実業道とするのがよい。日本人はあくまでヤマト魂の生まれ変わりである武士道で世に立っていくしかなければならない。商業であれ工業であれ、この心を自分の心とするならば…中略…商工業においても（日本が）世界においてその実行力を競うことになっていくだろう。

ヤマト魂や武士道を誇りとするわが日本で、その商工業者が道徳の考え方には乏しいというのはとても悲しむべきことだ。

「人民とは政策に従わせねばよい…」という徳川時代の考え方方が起因し、治められる側にいた農業や工業、商売に従事する生産者たちは、道徳教育とは無関係に置かれ続けた。このため、自分でも正義や踏むべき道に縛られる必要などないと思うようになってしまった。（治める者と治められる者を区別する朱子学を信奉する林家に対する“恨み”？）

栄一の思想（目指すところ）は、単なる道徳論にとどまらず、実践と精神の両輪で社会を良くするための哲学

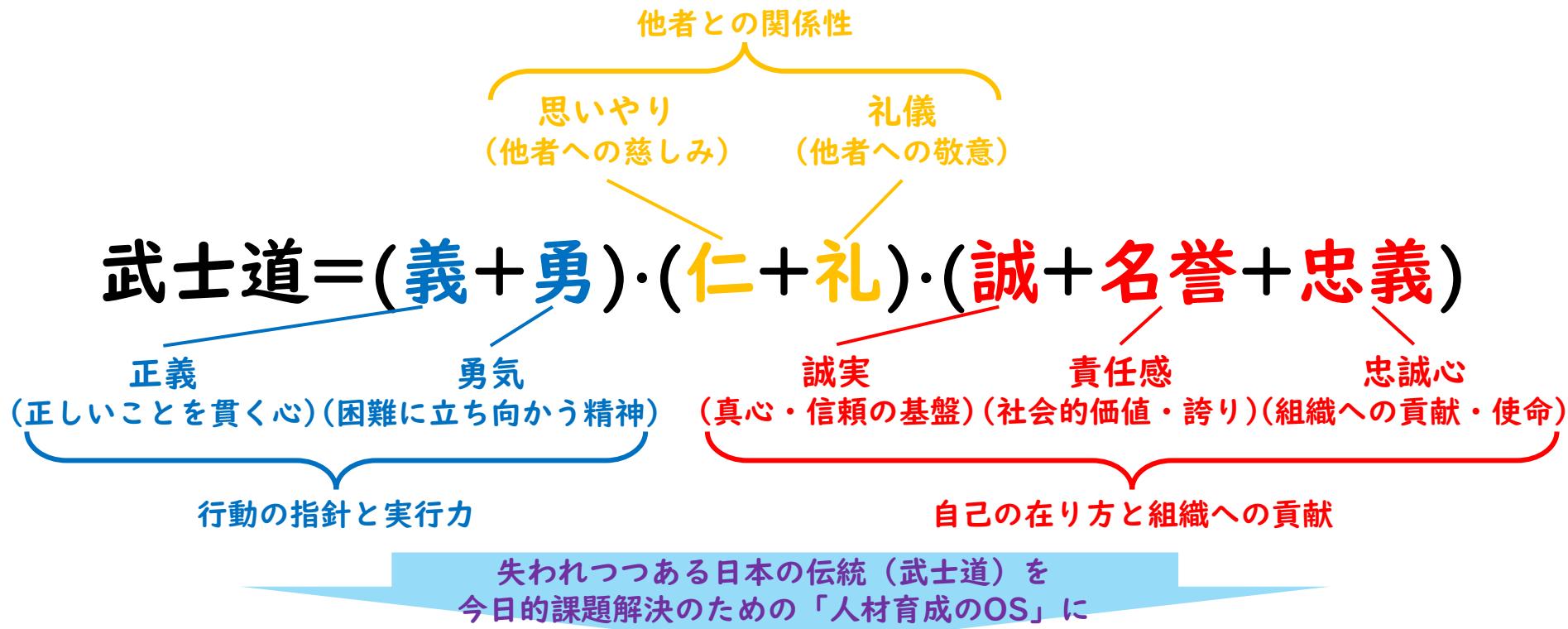


【武士道を「今」に活かす際のヒント】

「武士道」を構成する7つの徳目

義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義

「武士道」を因数分解のカタチで7つの徳目を整理してみる



そのために、武士道を「精神論」でなく「価値観のフレームワーク」と認識したい

徳目	今日的解釈（人材育成の観点から）	組織にもたらす期待効果
義	判断に迷った際の論理的で公正なコンパスの共有	組織員の主体性の醸成
勇	失敗を恐れず、正しいと信じることに挑戦する勇気	チャレンジ精神の風土化
仁	顧客や同僚への思いやり・支援行動と傾聴のスタンス	チームワーク強化・離職防止
礼	形式でなく相手への真の敬意に基づくコミュニケーション	信頼の構築・ハラスメント防止
誠	真摯な対応を重ねることで築く「信頼」という無形資産	ブランド価値向上・顧客信頼
名誉	自己（の仕事）が果たす社会的役割の認識から得る誇り	内発的動機付け、プロ意識向上
忠義	所属組織の使命・ビジョンへの共感に基づく貢献	組織へのエンゲージメント向上